

周福南 台日文化経済協会会長インタビュー

国立台湾大学歴史学研究所博士課程 寺山 学
(元日本台湾交流協会台北事務所総務室長)

今回は、民間の立場から長年にわたり日台関係に尽力され、昨年台日文化経済協会の会長に就任された周福南氏に、同協会の歴史やその活動、周会長と日本との関わりなどについてお話を伺いました。

- ・インタビュー実施日 2025年6月30日
- ・インタビュー実施場所 台日文化経済協会

<周福南会長略歴>

1941年、台北市生まれ。1964年、国立政治大学国際貿易学科卒業後、貿易関連会社にて勤務。貿易会社（綸欣實業股份有限公司など）を起業し、長年日本をはじめとする各国との貿易に従事。近年は、ロータリークラブ幹部のほか、政治関連団体である台湾国家連盟、台湾安保協会の幹部や、1909年に創設された漢詩同好会「台灣瀛社詩學會」名誉理事長などを歴任。2024年、台日文化経済協会会長に就任。日本の短歌に造詣が深く、これまでに800首を超える短歌を創作。



台日文化経済協会について

——周会長は昨年、70年以上の歴史を有する台日文化経済協会の会長に就任されました。まず、戦後長きにわたって日台の民間交流を促進されてきた台日文化経済協会についてご紹介いただけますか。

周会長 本協会は、1952年に設立された台湾で最も歴史のある民間団体の一つです。当時、何応欽、張群をはじめとする96名もの政界、学界及びビジネス界の有力者が賛同し、日台間の経済・文化関係を促進することを目的に、半官半民の形で設立されました。歴代の会長は張群、何応欽、林永樑、許敏恵、蔡行華、方仁恵、鄭祺耀、黃天

麟、杜恒誼であり、私でちょうど10人目の会長となります。初期の会長である張群（※戦前日本の陸軍士官学校などで学び、外交部長や行政院院長などを歴任、戦後は總統府秘書長などを務めた蒋介石總統の側近）及び何応欽（※張群氏と同様、戦前日本の陸軍士官学校などで学び、国防部長などを歴任）の両名は外省人で、いずれも軍に背景を持つ会長でしたが、第三代会長の林永樑以降は、台湾出身者に代わり、またその多くがビジネス界の出身者となっています。

台湾の民主化とともに、本協会の役割も大きく変わりました。まず、組織の形態が半官半民から純民間の一般社団法人へと移行し、2005年6月には、国際社会において「中国」と「台湾」の混同による誤解を避けるため、協会の名称を「中日



外務大臣表彰受賞式（日本台湾交流協会FBより）

文化経済協会」から「台日文化経済協会」に改名しました。

2022年には、大変名誉なことに、日本側に日台関係における本協会の役割を評価して頂き、本協会は外務大臣表彰を受賞することができました。また、2022年は本協会設立70周年の節目の年でもあり、日本台湾交流協会の泉裕泰前代表、蘇嘉全・台湾日本関係協会会長をはじめとする日台の来賓の方々のご出席の下、記念の式典を行いました。当日は、本協会の長年のパートナーである日華（日台）親善協会全国連合会の皆様ともオンラインで記念の交流会を行いました。

本協会は長きにわたり日台関係に携わってきたことから、戦後初期の張群会長や何応欽会長に関する史料や、外交部との間の書簡など、多くの歴史的な文書を保管してきました。2021年、日台関係に関する研究に役立てて欲しいとの思いから、本協会が保管してきた関連文書を国史館に寄贈しました。今後、国史館による文書の整理・公開を通じて、戦後の日台関係史の研究が更に進むことを期待しています。

——民主化以降、協会の活動方式においてどのような変化が生じましたか。

周会長 民主化以前の時代は、主として国営企業による資金提供を基礎として活動を行っていましたが、民主化以降は、民間企業の自発的な寄付によって運営する形に変化しました。協会の役割についても、民主化以前は双方間の企業家交流の促

進が主たる活動内容でしたが、民主化以降は、特に文化面での交流に力を入れて活動を行ってきました。

——現在、協会が行っている活動についてご紹介頂けますか。

周会長 まず、毎年行っている学術的な活動として、大学生及び修士課程の学生が参加する「日本研究論文コンテスト（中国語名：奨励大專院校日本研究論文比賽）」及び日本で修士課程の留学を行う台湾人学生を対象とした「杜万全日本修士奨学金（中国語名：杜萬全日本碩士獎學金）」の二つの活動が挙げられます。「日本研究論文コンテスト」は、今年で第12回目となる論文コンテストであり、修士学生の部と大学生の部の二つの部門に分かれて行われています。修士学生の部門では、日本に関連する文化と経済の二つの分野の論文が応募対象となり、各部門一位から三位まで賞を授与しています。大学生の部では、毎年異なるテーマで論文を募集しており、今年のテーマは「外国人とのよりよい共生社会の実現に向けた日本への提言」です。こちらも一位から三位まで賞を授与しています。なお、この論文コンテストには台湾の大学・大学院に所属する日本人学生も応募することができ、昨年は日本人学生も賞を受賞しました。次に、「杜万全日本修士奨学金」は、台湾の知日人材の育成を目的とした奨学金であり、今年で第8回目となります。今年には5名の学生に対



2024年度論文コンテスト授賞式（筆者撮影）



日華（日台）親善協会全国連合会との姉妹会締結35周年記念式典
（台日文化経済協会FBより）

して、計25万元の奨学金の供与を行う予定です。

こうした学術面での活動以外では、日本側の台湾関連の団体との交流を積極的に行っています。例えば、1989年に本協会と日華（日台）親善協会全国連合会との間で姉妹会の協定を締結し、これまでに様々な交流活動を行ってきました。昨2024年は姉妹会締結35周年の年であったため、台北で記念式典を行い、日華（日台）親善協会全国連合会から藤井孝男会長、亀井久興名誉会長、丹羽太一理事長をはじめ50名を超える関係者が出席したほか、林佳龍・総統府秘書長（当時）や日本台湾交流協会の片山和之代表にも出席いただき、盛大に節目のお祝いをすることができました。

そのほか、日本李登輝友の会、日華（台）親善友好慰霊訪問団をはじめとする日本側の友好団体とも様々な交流活動を行っております。また、本協会が主催した直近の活動として、6月11日、謝長廷前駐日代表による「台日関係の展望」と題する講演会を行いました。

——会長として、今後さらにどのような活動を行っていきたいと考えていますか。

周会長 本（2025）年9月に国立政治大学に安倍晋三研究センターが設立される予定であり、本協会としても、同研究センターと何らの協力ができないか模索しているところです。具体的な内容についてはこれから決めていくこととなりますが、個人的には例えば学生向けの奨学金の供与などが一案として挙げられると思います。

周会長と日本との関わりについて

——周会長は日本語が大変流暢ですが、日本との接点について教えていただけますか。

周会長 私の家庭は、日本統治時代の所謂「国語家庭」であったため、両親は家庭内でも日本語で会話することが多く、戦後になっても家の中では台湾語とともに日本語が話されていました。こうした家庭環境のため、私の姉は、日本語が大変流暢であり、日本統治時代に台北第三高等女学校を卒業した後、台湾総督府で勤務するほどでした。私自身は4歳で終戦を迎えたため、日本統治時代の記憶は殆どありませんが、戦後も含め幼少期から日本語に触れる機会が多くありました。ただ、学校に通学するようになると日本語に触れる機会は減り、大学でも第二外国語としてフランス語を選択したこともあり、社会人になるまで特段日本語を学ぶ機会はありませんでした。その後、再び日本語を使うようになったのは、大学卒業後、繊維自動織機と紡織染料を取り扱う貿易会社に入ってからです。と言うのも、この貿易会社の主な取引先は、金沢の自動織機会社だったのです。そのため、頻りに金沢に出張する機会があり、ビジネスの場を通じて、幼少期に触れた日本語を思い出しながら、日本語を話すようになりました。なお、この時の訪日で特に印象深く覚えているのは、日本で目にした学生によるデモ活動です。当時の台湾は戒厳令の真ただ中であったため、普段デモ活動を見ることなどはなく、日本で目にした学生運動に強い衝撃を受けました。この経験は、私の政治的意識を強く刺激するきっかけとなりました。

——日本との関係ではどのような分野に関心を持っていますか。また、これまでの日本側との交流の中で、特に印象に残っている出来事などがあれば教えてください。

周会長 私は台湾の安全保障問題に関心を持っており、これまでに日本側の友好団体と安全保障の問題をめぐり様々な交流を行ってきました。この



安倍元総理との懇談（周会長提供）

問題は今後ますます重要になるため、日本側と相互理解を深めるための交流を引き続き行っていきたいと考えております。

これまでの日本側との交流の中で特に印象に残っていることは、2011年に訪台した安倍晋三元総理と懇談したことです。当時、私が幹部を務める台湾安保協会が歓迎の夕食会を催しましたが、その際に私の短歌集（『香る園』）を安倍元総理にお渡ししたほか、会食の中で台湾側から日本にとっての喫緊の課題は為替の問題であるとの話を安倍元総理にしたところ、大変関心を持って聞かれました。その後、安倍元総理が再び総理に就任して以降、政権の重要課題として為替問題に取り組み始めたことを見て、我々との懇談も多少の参考になったのではないかと思います、とても嬉しく感じました。

——周会長は長年、文化面の日台交流にも積極的に携ってこられました。

周会長 文化面での交流については、私自身歌人であることから、特に詩を通じた日台交流に取り組んできました。例えば、私は漢詩同好会「台灣瀛社詩學會」の名誉理事長を務めてきたことから、日本の漢詩団体との間で漢詩を通じた交流を行ってきました。日台は共に漢字を用いることから、たとえ双方間で言葉は通じなくても、漢詩を通じてならば、大変有意義な交流を行うことができます。また、4つの声調しかない北京語と違い、台湾語には8つの声調があり、台湾語の発音は漢詩



日台漢詩交流（周会長提供）

が盛んであった古代の中国語の発音に近いとされています。こうしたこともあり、日本側の漢詩関係者も台湾側との交流に非常に積極的でした。

漢詩以外では、20年ほど前から、日本人の先生の下で日本の短歌を学び始めました。当時、「香る園の会」という短歌の同好会を組織し、毎週定期的に会合を行いました。それ以来、日常的に短歌を創作するようになり、これまでに創作した短歌は800首を超えます。「香る園の会」はその後活動を休止してしまいましたが、今でも台湾短歌会には定期的に参加しています。

——日台関係について詠った短歌も多く創作されていると伺いました。いくつかご披露頂けますでしょうか。

周会長 では、日台関係について私が詠んだ5つの短歌を紹介させていただきます。

① 「慶修院」（2012年11月2日）

真言の伽藍に響く慶修院法燈絶ず民を慰む

この歌は、花蓮県吉安郷にある日本統治時代に建てられた寺院「慶修院」を訪れた際に詠ったものです。同寺院の本尊は弘法大師（空海）であり、日本統治時代に高野派の「吉野布教所」として建立され、戦後慶修院に改称されました。

② 「南菜園歌碑」（2015年11月28日）

南菜園に北白川妃の歌残る児玉の功ここにも伝へ



北白川宮能久親王妃の石碑（周会長提供）

この歌は、台北市の南昌公園（日本統治時代の児玉源太郎総督別荘地）に現存する北白川宮能久親王妃の和歌（國のためたてしきをはもりその山より高くおもほゆるかな）が記された石碑について詠ったものです。北白川宮能久親王妃は、1895年に台南で逝去されましたが、1901年に能久親王妃が訪台された際、時の総督児玉源太郎の施政を讃え、この歌を詠まれました。なお、親王妃の歌中の「もりそに」は、当時外国人の間で「摩里遜山」と呼ばれた「玉山（新高山）」のことを指します。

③ 「台日漢詩會」（2019年9月10日）

台日の詩人集ひて漢詩詠む雅なる聲名月を呼ぶ

この歌は、先ほどご紹介した日台の漢詩交流会について詠ったものです。

④ 「敬悼安倍晋三首相」（2022年7月9日）

日台の絆大海超ゆるごと次世代まで安倍の功し
日本の民主に盡くし安倍晋三の功は永久に邦を護らむ
「香る園」渡せば慈悲の眼差しに安倍首相の冥福祈る

これまで安倍元総理に関する多くの短歌を創作してきましたが、これらの歌は安倍元総理が亡くなられた翌日に安倍元総理の功績を称えたいとの



安倍元総理に対し和歌の詠みあげ（台日文化経済協会FBより）

思いで詠ったものです。その後、私は台日文化経済協会の関係者21名を率いて、弔問のため日本台湾交流協会台北事務所の特設会場に赴いた際、私から安倍元総理に対してこれらの歌を詠ませて頂きました。

⑤ 「宴日本慰霊團」（2024年11月25日）

日本より台湾英霊追悼の人等との宴絆深まる
慰霊團戻るの宴懐かしむ時空を越えて絆深まる

これらの歌は、先の大戦で亡くなられた方を慰霊するために毎年台湾を訪問されている日華(台)親善友好慰霊訪問団との交流について詠ったものです。



日華(台)親善友好慰霊訪問団との交流（周会長提供）

——本日はお忙しいところ、ありがとうございます。
した。

周会長 日台関係の更なる発展のため、微力なが

ら私も引き続き尽力していきたいと思います。日
本の皆様には、是非台湾を訪問して頂ければ嬉しい
です。



取材中の一コマ